

ミュージカルの舞台出演を夢見て



月が移り変わったところで“A big surprise!”（びっくりニュースです）。この11月2・3日、私は有楽町の東京国際フォーラムの舞台に立つことになりそうなのです。

舞台芸術を通して国際交流に取り組むNPO法人・国連クラシックライブ協会が主催するミュージカル「赤毛のアン」の出演者の公募があり（8月8日付け朝日新聞）、地元のシニアクラブ会長の「出演してみたらどうですか？」との声に押されてその気になり、オーディションに行ったところ、発声、ダンス、自己紹介の三つがあり、なんとこの歳（72）で合格したのです。たぶん、5年前『赤毛のアン』出版100周年の際に、物語の舞台カナダのプリンスエドワード島に取材で行っている、といったアピールがよかったのかもしれませんが。

公募は主役のアンとその友人、合唱・ダンスのメンバー。他はプロの俳優がかためています。60人ほどの練習仲間には70代が自分を含めて2人、あとは10代から50代くらいまでの若い層で、心身の若返りにもなっているのかな、なんて感じています。実は5年前、カナダに取材に行った時もそうでした。

「エッ！いい年をしたオジサンがなんで少女物語の舞台なんかを訪ねるんだい？」。私自身も当初、ちょっと気恥ずかしさもあったのですが、英文の原書に加え日本で初の村岡花子訳と直近の松本侑子訳を読んでみると、いやいや、どうして！ 作品は若い女性ばかりでなく、男性も、特に身体だけでなく心も枯れてきているシニアこそ、アンの瑞々しさを吸収すべきだ、との確信を抱くようになったのです。

孤児だったアンが引き取ってくれたマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、それまで世間づきあいが苦手で、兄妹だけでさびしく生きてきた二人も、人を愛する喜び、人から愛される喜びを知って心豊かな大人へと成長していく。その人間としての幅の広がり、いろいろな示唆を与えてくれるような気もするのです。

ミュージカルのすばらしさは、舞台設営とコーラスにダンス、そして出演者の演技と歌唱が、活字だけでは表現できない情感を高めてくれることです。ミュージカルの特性を十分に堪能していくのに『赤毛のアン』は最適の文学作品の一つだと思います。

10曲ほどの歌（「国連賛歌」を初め半分弱が英語です）の音符が拾いきれず、ダンスも足がもつれたりして若い仲間には追いつきませんが、現役医師の日野原重明氏が100歳でミュージカル「葉っぱのフレディ」を演出・出演したという姿に勇気もらい、自分も年相応に挑戦しているところです。当日、国際フォーラムの舞台でどこまで踊れ歌えるか、これからの練習にかかっていますが、“Never give up!”の精神で、アンのように夢に向かって頑張ろう、と思っているところです。



プリンスエドワード島にて

国連クラシックライブ協会（タイトル下のイラストと写真はこのホームページからです）については下記のURLからご覧ください。

<http://www.classiclive-un.org/>